

オム・ソンバット著・岡田知子訳  
『地獄の1366日——ポル・ポト政権下での真実』  
財団法人大同生命国際文化基金 二〇〇七年

本書は、ポル・ポト政権下での著者と家族の一三六六日間（一九七五年四月一七日から一九七九年一月三日まで）の生活を綴った記録である。著者オム・ソンバット氏は約七〇〇ページにおよぶこの記録を一九七九年一〇月初めから書き始め、一九八〇年四月初めには書き終えたとのことで、六カ月あまりの短期間で書き上げたことになる。だが、本作品はその後著者の手元に置かれたまま、約二〇年近く公表されることがなかった。ようやく出版の運びとなったのは、ポル・ポトの死後一年を経た一九九九年のことである。

本書には、著者の家族について語った「はじまり」を導入として、クメール・ルージュ（カンボジア共産党）のプノンペン制圧により開始された著者たち家族の強制移住、強制労働の恐怖と不安に満ちた過酷な人生が語られているが、同時にカンボジア人の自然観、精神世界も書き込まれていて、本書を苦難の生活の記録書に留めることなく、内容に奥行きと深さを与えている。

「家を出るのは三日間だけです」と黒服、黒帽、手に短銃の

兵士に促され、行き先も告げられず、著者は親兄弟など二人の親族でプノンペンを後にするが、その後の過酷な試練に耐えて、一九七九年一月のポル・ポト政権崩壊まで生き延びたのは著者ソンバット氏と末弟の二人だけであった。

この四年近くにおよぶ著者と家族の苦難の人生を要約して紹介することはかなり難しい。ここでは、本書中、特に関心を引きつけられた出来事、場面などをいくつか取り上げること、内容の一端に触れることに留めたい。

一九七五年四月一七日にクメール・ルージュの解放区にいなかった、主に都市部にいた人々は「新人民」と呼ばれ、解放区にいた「基幹人民」と区別され、強制移住、強制労働の対象となった。「新人民」ソンバット氏たちは途中、病気による両親との死別に胸を痛めながら、カンボジア北西部管区第五地区に移動、強制労働に駆られる。病気になる入院したソンバット氏は革命人民病院なるものの実態を知らされる。「医師の多くは少女で、なんの医療技術も持っていなかった。（二部略）彼女たちは注射も打てないし、血管を探す方法も知らなかった」(127)。病院は横になったまま、医者も薬もなく、死ぬ日を待つだけの場所なのであった。

「堤防と貯水池を造るのは、北西部管区第五地区の大事業だった。一九七七年、一九七八年、一九七九年の三年計画だった」(208)。特に、トロペアン・トゥモ貯水池の造成は大規模な工事で、それに伴い労働も過酷なものになった。一九七七年二月半ばから開始された工事現場には三万人以上の人が集められ、労働は一日一六時間におよんだという。この貯水池造成

の現場をソンバット氏たちが最終的に離れるのは一九七八年五月のことで、「最後の別れ」のなかに語られている。本書目次を見ると、「トロペアン・トゥモー貯水池」から「最後の別れ」までの間には二四の見出しが置かれている。この間、一年三カ月ほどが経過したことになるが、この貯水池造成をはさんで二四ものさまざまな出来事、話題をソンバット氏は次々に語る。因みに、本書には最初の「はじまり」から最後の「自由」まで、全五八の見出しが掲げられている。

「訳者あとがき」を見ると、「ポール・ポト政権下で多大な犠牲を払って行われた灌漑工事は、技術的難点も多く未完成に終わっているところが多い。(一部略)ただ、すべてが失敗だったわけではなく、ソンバット氏が仕事にかかわったトロペアン・トゥモー貯水池は成功例の一つである……」(49)と書かれている。このことに関連し、重労働のなか仕事を成し遂げた人々の達成感が本文中に語られている。「重労働で疲労困憊し、地面や森でそのまま寝なければならなかったのだが、誰もが有頂天になっていた。みんな自分たちが成し遂げた偉業に感動していた」(237)。ポール・ポト政権下の恐怖政治からは連想しがたい描写であるが、これも真実に違いない。

伯父、姪、養女、異父姉たちの病没。すぐ下の弟の理由不明の連行、殺害。身近な友人たちの連行、殺害。実の姉の些細な盗みを理由とする連行、殺害。ソンバット氏は次々と不幸に見舞われる。カンボジア語で「オンカー」と呼ばれるクメール・ルージュ革命組織は、「残しておいても得にならない、取り除いても損にならない」をスローガンのひとつに掲げていた。ソンバット氏は「革命」、「組織」についてこう語る。

「生きるためには、指示に従うしかなく、それで国を建設しようが、国を滅ぼそうが、私たちの知ったことではないのだ。生きるためには、ただ革命をするしかないのだ。個人は、国家建設に参加することが大切なのだ。だが、その前に自分を建設することが大切なのだ。国家を建設するのは自分を建設することだ。自分を建設することなしに、国を建設することはできない。自分を愛することなしに、自分の家族を愛することはできない。国家を愛することはできないのだ」(294)。「だがまだわからなかった。革命はなんのためにしているのだろう。革命では、子どもは親のことを忘れ、弟は姉のことを忘れなければならないのだろうか？」(303)。「彼らも人間なのに、なんの容赦もなく人間を殺す。彼らもカンボジア人なのに、なんの躊躇もなくカンボジア人を殺す。一体なんのために？」(351)

これらの言葉はソンバット氏の間人としての心からの叫び、問いかけのように思われ、胸を打つ。

労働現場から労働現場へ。宿营地での生活。自然の移り変わり。ソンバット氏はさらにさまざまな出来事を体験する。そのひとつに恋の芽生えと失恋があった。ソンバット氏は愛の大切さを語る。「……失恋した人だけが、その苦しき、辛さがどれほどのものなのか理解することができず。少し前まで、私の人生はもう終わりに近づいていると考えていた。人生で大切なものは何もないと思っていた。だが今、失恋という苦しみに直面し、失ってしまったことに対する苦しみがどれほどの大きさのものなのかを知った。人生を生き生きとさせ、色を添え、美しさを与えるものは、ご飯やお粥だけではない。愛がなければならぬのだ！今、私の愛は飛んでいってしまった。私の恋は

消えてしまったのだった！」(425—426)

本書では、一度に二〇組から三〇組、多い場合で七〇組から八〇組が結婚式に臨む「革命の結婚式」の特異な光景についても語られる。

宿营地暮らしということが直接に関係するのであるが、本書にはカンボジアの自然とカンボジア人の関わり合いが随所に描かれる。自然は人々にとって脅威ともなり、癒しともなる。一年中で最も暑い陰暦五月の太陽は人々の命を脅かす怪物だ。「太陽がその鎌首をもたげ、東から真つ赤に輝く光の毒を大地に吹きかけ熱くする」(215)。「太陽が東の森の端を越え、真つ赤な丸い顔を出し、人間界を焼きはじめた」(393)。

夜は過酷な労働で疲労した人々に癒しの音を奏でる。「下弦の夜であろうと上弦の夜であろうと、いつも自然の奏でる静かな音楽を聴いた。谷川の水は上から順々に、さらさらと落ちてくる。魚が水から飛び跳ね、パシヤン、ポシヤンと水に入る。夜風がビュービューと吹く。枯葉がはらはらと落ちる。虫やコウロギがチリリと鳴く。時折、野生の鶏がコケーコーと鳴く。フクロウが近くにやってきて、ホー、ホーと鳴く。夜のけだるい鳴き声につられて、ぐっすり眠ることになる」(202)。

透明な澄んだ光を大地に降り注ぐ月を、人々はどう見ていたのか。「こんな情景にうつとりし、深く味わい、また涼しげな光の波に、恍惚と見とれている時間などなかった。今、月は私たちの平安にとつて敵だった。月が昇れば、それは疲れと汗を流すことを意味した。人からの命令を待つまでもなかった。私たちは自動的に鉞やぎる、天秤棒を担ぐ。ああ！美しい月よ！今、あなたは不吉なものとして名高い。あなたは依然と

して美しく、そして愛すべき月であることに変わりはない。だが労働者たちにとつては、あなたは魔物、私たちを怖がらせる魔物なのだ。会いたくない。ずっと地平線の向こうに埋もれていれたいのにと祈る。私たちがこの苦しみから逃れることができるまで、いつまでも」(257)。

暗い夜には人々は星を眺めた。「下弦の終わりの夜、目の前も見えないぐらい真つ暗な時は、仕事はできなかった。食事が終わるとみんな体を伸ばして、大空の下、大地に並んで横になった。真つ暗な空を美しく飾る星が所狭しと輝いている。それはまるできらきらと輝く光が集まった蓋のようだった」(257)。

本書には、月の満ち欠け(陰暦)で生活のリズムを刻むカンボジア人の生活感が全編に流れている。また、神や目にみえないものの力を畏敬するカンボジア人の信仰心も語られている。

「陰暦一〇月下弦二日の月の光が、扉のついていない入口から、小屋の中に差し込んできた」(87)。

ソンバット氏の母が亡くなったのは卯年陰暦一〇月上弦三日、ほどなくして父が亡くなったのが同じ月の上弦一二日である。

「この森に来てすぐに私は頭を剃って願掛けをした。病気が治るよう、仕事ができるほどの体力が回復するよう、ネアクター(村の守護神で、村の入口などに祠がある)に祈った」(116)。「幽霊」という見出しのなかで語られる子連れ幽霊との格闘の話など、にわかには信じがたいけれども、カンボジアの人々なら誰もが信じて疑わないに違いないのだろう。

ソンバット氏の過酷な体験は続いた。彼の胸には相変わらず革命に対する不信感が去来する。「一体誰が今、この国を指導

し、治めているのだろうか？ 全くわからなかった。こんなことをするのはなんのためなのか？ 私たちをどこに導いていこうとしているのか？ 誰も知らなかった」(435)。

しかし、一九七八年二月、「組織」は豹変ぶりを示し始める。ソンバット氏たちもこのことに気づく。この突然の状況変化を理解するすべはソンバット氏たちにはなく、当然背景の説明など本文には一切語られていない。しかし、この時ポル・ポト政権は末路に追い込まれていたのだ。

藤を担いで砂地の道をよろよろ歩いてきたソンバット氏たちは思いがけない光景に出くわす。

「……突然前方で土埃が舞い、それが少しずつこちらに近づいてきて大きくなつていき、太陽の光を遮った。乗っている人たちのワアワア叫ぶ声が出た。何か楽しいことでもあるかのようだった。

「万歳！ もう自由だぞ！ 万歳！ 自由だぞ！ 万歳！ 万歳！」

牛車がちちらに走つてくると、年配の女性たちが叫んだ。

「戦線が解放してくれたんだよ！ 藤の束なんて降ろして、故郷にお帰り！ もう自由なんだよ！」(478)

本書最後のふたつの見出し「最後の宿营地」と「自由」には、解放区に住んでいた「基幹人民」たちの生活ぶりがソンバット氏たち「新人民」のそれと対照的に語られている。「北部管区に来て、ここの人々は北西部管区のように悲惨な生活をしていないことがわかった。ここには移住させられてきた人はいなかった。みんな基幹人民で、元々ここにいる人たちだった。協同組合や共同食堂はあるものの、食事は自由だったし、充分

に満たされていた。みんな血色も良く丈夫で、体力もありそうだった。私たちを見て驚き、同情してくれた。可哀想に思つて、私たちが村を横切る時には、お菓子をこっそりくれたりした」(479)。

「同じ社会に住んでいたというのに、彼らは私たちのようなひどい目には全く遭っていないかった。彼らは驚き、そして私たちに同情してくれた」(486-487)。

本書を読んで、まず、このような書物がカンボジア人によつてカンボジア語で書かれ、カンボジアで出版されたことの意義の深さと価値の大きさを強く感じた。この書物が、著名人でも職業作家でもない一般庶民によつて書かれたことにも驚嘆の思いを抱いた。

「日本の読者のみなさまへ」のなかで、著者は本書についてつぎのように語っている。「これはある家族の苦しみと悲しみの記録ですが、同時にカンボジアの暗黒の時代を経験した、すべてのカンボジア人の苦しみと悲しみの記録でもあるのです。また、後世のカンボジア人への遺言であると同時に、ポル・ポト時代を経験しなかった世界中の人々に対するメッセージでもあるのです」(2-3)。

七〇〇ページにもおよぶ本書執筆の経緯については、「はじめに」のなかで「私は暗黒のポル・ポト政権下を生き抜いた後、(一部略)こつこつと書きとめた」(11)と氏は記している。そもそも四年近くにおよぶ異常な体験の月日をどのように記録に留めていたのかについては、本書中に述べられている。「プノンペンを出た時から、私は場所の移動や自分がした仕事

など、重要な出来事の日付を鉛筆でノートに書きつけていた」  
(376)。

「訳者あとがき」によると、著者のオム・ソンバット氏は一般庶民としてはかなりの文才の持ち主であることが窺われる。

この作品が外国語に翻訳、紹介されるのは本訳書が初めてのことと、このことの意義深さに改めて思いをめぐらせた。

カンボジア固有のさまざまな植物や魚介類などを含め、翻訳にはいくつか困難が伴ったことと思われるが、本書は明快な文体で訳出されている。また懇切丁寧な「訳者あとがき」も読者にとって本書理解に大いに参考になる。

本書が今後、世界のさまざまな外国語に翻訳、紹介されることを願って止まない。

ポル・ポト政権元幹部を裁くカンボジア特別法廷は、開廷の準備作業が遅れているようであるが、今後の展開を見守りたいと思う。

(川口健二)